1998 Humanities / Outline

「人間と人との間」という題で、人間を人間たらしめているものを問う論文。まさに人文科学的な問題と言えるだろう。文章の構造は以下の通りである。

1 ヒトの早産と生物学的特徴
2 幼児と刺激
3,4 言葉の重要性 -大海から世界へ-
5 言語以外のコミュニケーション
6 間主観性と自我

設問は基本的に論文の流れに沿って出題されており、解答はしやすい。文化、主観性、間主観性、共同体、自我など、この論文に特有の定義がなされている語句があり、これらの語句をいかに整理して読み進んでいくかがポイントとなっている。全体としては無理なく解答でき、時間内に十分解答可能であろう。

＜学習のポイント＞
・この年度は難しい問題と簡単な問題の差が激しい。難しい問題に時間を使わず、簡単な問題に集中すること。特に E、M レベルの問題がどれであるか確認し、実際の試験では簡単な問題のみを選択できるよう練習を重ねたい。

Answers

難易度　E = Easy M = Middle D = Difficult D+ = Very Difficult

1.－ a （1 章 10 段落）	難易度 E
論文の主題より解答	

これは全員正解の問題。論文を一読すれば a の「延長する子宮」が答えであることはすぐに分かるだろう。

「…共同体は、出生後ほぼ七年ほどは、依然として一種の「子宮」、言わば「延長する子宮」だと考えられる。彼や彼女が世の中で初めて出会う共同体こそは、赤ちやんを包み、育てる、もう一つの子宮ではなかろうか。そこで、ヒトは言葉を覚え、共同体のなかで

©BUCHO.NET

暮らせるように訓練を受ける。一言で言えば、「人間」になっていくのだ。」（1 章の 10 段落）

上記の箇所などで人間になっていく上で家族などの「共同体」は不可欠なものであり、筆者はそれを「延長する子宮」という風に表現している。よって a が正解となる。

さらに、後述の問 8 においても「この文のキー・ワードの一つは「延長する子宮」です。」とわざわざ述べられている点にも注目しよう。

2.－ d （1 章）	難易度 E

1 章の内容より解答。

直立 2 足歩行「失ったものもある」という記述が該当するのは 1 章 6 段落であるが、その個所においては何を失ったかが記述されていない。よって d の「文中では特に私的していない」が正解となる。消去法を用いて確実に答えたいところ。

a 大脳の肥大化は二足歩行によって大きな頭骨を支えることによって実現したものであり失ったものではない。
b. 生得的な能力がいったん完全に消失する、ということは 2 章で述べられているが、筆者はこのことを人間が成長がしていく上で不可欠なものと説明しており、価値的な判断はなされていない。
c 母親の存在は不可欠なものであるとはされているが、母親依存はむしろ二速歩行によって得られたものであり、このことによって人間として不可欠な能力を得ていく。

3.－ a （1 章 7 段落）	難易度 M

該当の読み取りの問題。

勘で答えずに、本文の内容を検討した上で答える。

「ヒトの赤ちゃんには、たとえオオカミであっても、育ててくれる「母親」や家族がどうしても必要だということを教えてくれる。それは哺乳動物に関しては一般に見られる特徴ではないか、という疑問は正当である。」（1 章 7 段落）

以上の箇所より、哺乳動物には「育ててくれるものが必要」という内容が読みとれる。

©BUCHO.NET

この筆者の考えに最も近いものは a の「育児者」であろう。
b は哺乳動物の一般的な特徴であり、明らかな引っ掛け問題。
c や d は人間の特徴であると言える。

4.－ b	難易度 D+

知識問題

問題の対象となっているのは、出題された当時に議論されていた「臓器移植法」に関するものである。出題当時の時事的な要素を含む問題なので、答えられなくても気にする必要はない。臓器移植法では以下のように定義されている。
「脳死した者の身体とは、その身体から移植術に使用されるための臓器が摘出されることとなる者であって脳幹を含む全脳の機能が不可逆的に停止するに至ったと判定されたものの身体をいう」
全脳とは、大脳、小脳、脳幹などすべての脳を含む。よって正解としては b の「脳全体の死」となる。参考までに選択肢に登場する脳の機関の機能は以下のようになっている。
大脳：精神作用、運動、知覚の中枢。人間の思考を司る。
小脳：身体各部の運動の反射中枢。平行感覚など。
脳幹：大脳と小脳を除いた部分。間脳、中脳、橋、延髄。呼吸など人間の生命活動に関連する。

5.－ a （1 章 7 段落）	難易度 D+

該当箇所より解答

筆者が「狼少年」「狼少女」などの話に専門家の判断に事寄せて留保しているという該当箇所は

「…何かの理由で、生まれたばかりのヒトの赤ちゃんが、ヒトによってではなく、オオカミなどの哺乳動物の家族のなかで育てられたと、いう話である。伝えられる話のすべてに信憑性があるわけではなく、ある程度割り引いて受け取らなければならないと、専門家は言うが…」（1 章 7 段落）

という部分である。この部分を言い換えれば、「オオカミ少年の話は伝えられた話であり、すべての話に信憑性があるわけではない」、という事になるであろう。

©BUCHO.NET

さて、選択肢を検討すると絞り込みに困るが、正解は a の「伝えられる話が間接的な伝聞に過ぎない」であろう。他の選択肢はそれぞれ該当箇所から読み取れない内容を含んでおり、a のみが余計な内容を含まない。

b 伝える人物が「学術的な観察者」か否かは読みとれない。
c 「正確な資料」として残っていたのかどうかは書かれていない。
d 時代的に古いか新しいかは書かれておらず、伝承の間に変化するか否かも述べられていない。
よって、「伝えられる話＝間接的な伝聞」という、よくよく考えるとあたりまえの事を言っている選択肢 a が、間違いではない選択肢になる。

＜ポイント＞
どれも正解であるような選択肢が並んでいる場合、「間違いではない」選択肢を選ぶ

6.－ d （1 章 9 段落）	難易度 D+

狼少年、狼少女の例の結論部より解答。

狼少年・少女の例は 1 章 9 段落において述べられている。

「「狼少年」や「狼少女」の例がヒントになる。そうした特殊な事情にあったヒトの子供は、六、七歳までに、人間の社会に戻らなければ、言葉を覚えることができないとも言われている。人間として社会のなかに生きることができない、あるいはそれが著しく困難になる、とも言われる。」

よって狼少年・少女の例より筆者の導き出した論点は d の人間の赤ちゃんが「人間」として育つべき出生後の時間はほぼ決まっている」であろう。
b の「人間の赤ちゃんには、人間以外であっても育児者が不可欠である」は引っかけなので注意。これはあくまでもほ乳類一般に見られる特徴と筆者が認めているものに過ぎず、最終的に筆者が行き着いた論点ではない。

7.－ d	難易度 E

知識問題

©BUCHO.NET

「水棲動物」という表現は 2 章 1 段落に登場するが、該当箇所では特に説明されていないので、単純な知識問題となる。水棲（水生）動物とは、水中に生活する動物のことであるので、正解は d の「胎児は羊水のなかに浸されて生きている」となる。常識的に答えられる問題。

8.－ a （1,2 章）	難易度 D
1,2 章全体の内容より解答	

1,2 章の内容全体が問われている箇所であるが、論旨が読みとれていればすぐに答えられる問題。また、問 1 も重要なヒントとなる。論文より、人間は生後七年くらいまでは、共同体という「人間」として育っていく環境が必要であるが、このことを述べているのは a の「哺乳動物の成熟にとっては、子宮は決定的に必要な環境だから」である。

選択肢 d は引っかけ。論文で使われている「延長する子宮」はあくまでも生物学的な子宮ではなく、比喩的に「成熟に必要なもの」ということをあらわす子宮である。また、1 章冒頭でも早産ということに関して「常識的に認められている期日よりも赤ちゃんが早く生まれがちだ、という意味ではない」と述べられているので、早産しなければ子宮の中に留まっているはず、という表現は不適当であろう。そもそも人間としての成熟に生後七年必要としているのに、それほどの長期間母胎に留まっているとは考えがたい。

9.－ b （1,2 章）	難易度 D+
1,2 章の内容より解答	

これも 1,2 章全体の内容から判断する問題。また、問 2 もヒントとなる。問 2 の該当箇所とも重なるが、新生児が無力であるということは 1 章 6 段落において述べられている。

「ところで、こうしてヒトが直立二足歩行によって得た（実は失ったものも決して少なくはないと考えられるが）頭骨の発達のおかげで、ヒトは早産気味になるとすれば、そこからほとんど必然的にある重要な事態が結果する。すでに見たように、本来より早めに生まれてしまったヒトの赤ちゃんは、その段階では全く無力であって、一人では生きることが不可能である、ということがそれである。赤ちゃんが育つために、少なくとも母親との共同生活が絶対に不可欠なのだ。」

さて、問題はその無力である新生児を筆者を「どのように評価しているか」ということ

©BUCHO.NET

である。しかしながら、筆者は 1,2 章を通して「新生児が無力である」ということに対しては評価を下してはいない。新生児が無力であり、共同体が必要であることによって人間は他の動物にはない高度な知的能力を得ていくことができるとは述べられている。しかしそのことを評価していわけでも、また批判しているわけでもない。もし「早産しない」他の動物との比較が必要であり、「人間は早産のおかげで頭がよくて、他の動物より素晴らしい！　人間最高！」という感じの記述が必要である。しかしながら論文からはそのような差別的な内容は読みとれない。よって正解は b の「とりたてて価値的な評価は下していない。」となる。

なお d が紛らわしいが「価値的には中立と見ている」わけではなく、評価自体を下していない。

＜ポイント＞

一つ覚えておきたい事としては、ICU の論文は ICU の教授によって執筆され、出題も基本的に同一の教授によって書かれている。よって、反社会的、非倫理的、反キリスト教的な考えは「筆者の考え」とはなり得ない（例えばこの問題の場合未熟のまま生まれる人間の方が他の動物より価値があるなどというものは正解にはなり得ない）。また、問題自体も同一の教授によって書かれていることから、他の問題や選択しも大きなヒントとなる。

10.－ c	難易度 D+
知識問題	

完全な知識問題。該当する分野は発達心理学である。発達心理学は精神の発達過程を研究する心理学の一分野。

11.－ d （2 章 2～4 段落）	難易度 E
どのような発見によって筆者の推定が可能になったかを考える。	

文脈的には幼児が生得的に持つ能力を失うことで、人間としての発育が可能であるとされているが、直接的に該当する選択肢はない。そこで、そもそもなぜ生得的能力が幼児にあるかということがわかったかということに立ち返ると、2 章 2～4 段落に述べられているような発見があったからである。

「もっとも近年、出生数時間から数日の、言わば生まれたばかりの赤ちゃんについて、面白い事実が次々に発見されてきた。」（2 章 2 段落）

©BUCHO.NET

そしてこの発見された能力の重要な点として、
「大切なことがある。それは、この「真似をする」という能力も、「歩く」という能力も、生まれて数週間後には、一旦完全に消失する、という点である。」（2 章 4 段落）
ということが述べられている。よって、筆者の推定は d の「新生児の生得的能力は一旦消失する」ということがわかったら可能になったということが読みとれる。

12.－ d （2 章 2～4 段落）	難易度 M

2 章結論部より解答

2 章の結論から筆者の主張を読みとる問題。2 結論部では人間の情報処理について以下のように述べられている。

「ヒトにあっては、原則として刺激は、大脳を経由してから処理されるべきもの、だから、刺激の大海のなかで、赤ちゃんは、生まれた後も情報処理機構としての大脳の発育を自ら行わなければならない。よく知られているように、ヒトにあっても、刺激のなかには、大脳を経由しないままに処理されるものはたくさんある。しかし、そうした能力に頼っていたのでは、ヒトは人間としての行動が極めて貧しくなる。そこで、生まれた後、刺激の大海のなかに浸りながら、大脳を経由して刺激を処理する機構を、大脳のなかに整えるばかりではなく、共同体という「延長する子宮」のなかで、どのようにそうした処理を行うか、その方法までも、学んでいくことになるのではないか。」

つまり原則としてヒトの情報処理は大脳を経由して行われるものであり、大脳を経由しないで処理することだけでは行動は貧しくなり、共同体のなかで、どのように大脳で情報を処理していくかということを学ぶ、という内容が読みとれる。該当箇所と完全に一致する選択肢はないが、d の「反射は一般に情報処理としては不完全である」が筆者の主張にもっとも近い。他の選択肢はそれぞれ誤りを含む。

a 確かにヒト的な行動といえるかもしれないが、結論部での「ヒトにあっては、原則として刺激は、大脳を経由してから処理されるべきもの」という記述に矛盾する。
b 人間にとって反射が重要であるか否かは述べられていない。
c 哺乳動物は反射だけで生きているとは述べられておらず、かつ一般的な考えられている事実にも反する。

©BUCHO.NET

13.－ b （3 章 8 段落）	難易度 E

文中で置き換え可能な語句を探す。

これは簡単。まず「刺激の大海」であるが、これは 3 章 2 段落で定義されているように、共同体における多種多様の刺激を意味する。さて、この設問は刺激の大海と同じ意味で文中で使われている語句を答える問題であるから、該当語句に「刺激の大海」当てはめてみて、意味が通じるものが答えとなる。このように同一語句を問う問題は置き換えの問題でもあることを押さえておく。さて、同一の意味をもつ選択肢は b の「刺激の万華鏡」である。3 章 8 段落にこの語句は登場する。

「…自分の感覚に与えられる刺激の万華鏡のなかから、ある特定の感覚（を与えている何か）が、「水」という言葉との結び付きのなかで、一つの意味、一つの構造に凝縮したのだ。」

該当語句の「刺激の万華鏡」（b）を「刺激の大海」と置き換えても意味は通じるので、この選択肢が正解である。

＜ポイント＞
語句の言い換えの問題は、選択肢の語句を実際に文中で当てはめてみて検討する。

14.－ d （3 章 8 段落）	難易度 E

ヘレン・ケラーに関する論述より解答可能。

ヘレン・ケラーに関する論述が理解できていれば容易に解答可能。ヘレン・ケラーは三重苦という状態にあったので、通常は緩やかに得られる能力である、様々な刺激から特定の刺激を選びそれに意味や構造を読みとるという人間の料力を「劇的」得ることとなった。また、ヘレン・ケラーの例をまとめている 3 章 8 段落においても
「ヘレンは、本来なら子供たちがもっとずっと小さいころに、自然な体験の積み重ねのなかで掴んでいるはずのことを、七歳になって、初めて一挙に体験したのだ。」と述べられており、このことに一致するのは d である。他の選択肢も間違いではないが、筆者の言うところの「劇的」とは、ヘレン・ケラーの<<water>>の例からも明らかであるように、「通常は緩やかに得られるものが急激に得られた」という意味で使われている。

©BUCHO.NET

15.－ a （4 章 2 段落）	難易度 E

4 章の内容より解答

4 章冒頭において言葉とコミュニケーションに関して論じられているが、そこにおいてはっきりと「こうして言葉は、その共同体に共通の「世界」を生み出す。言葉はコミュニケーションの道具だとよくいわれるが、人間どうしの間に言葉によってコミュニケーションが成り立つためには、少なくとも、ある程度共通の「世界」が共有されていなければならない。(4 章 2 段落)」と述べられているので、a を選ぶことは容易であろう。なお他の選択肢の内容はいずれも文中では述べられていない。

16.－ b （4 章 3 段落）	難易度 M

間主観性の定義より解答

「間主観性」の定義とは異なるものを選ぶ問題。間主観性の定義は 4 章 3 段落において述べられている。

「ある種の哲学者たちは、そうした状況を表現するのに「間主観性」という言葉を造った。「主観」というのは、ここでは一人一人の個人を指していると考えてよい。したがって「間主観性」というのは、複数の個人どうしの間に共通に成り立っていること、という意味である。」

さて、ここでポイントとなるのが「主観」の定義がなされており、「一人一人の個人を指している」とされている点である。また、間主観性とは、「複数の個人どおしの間に成り立って」いるわけであるから、「主観性」と「間主観性」は明らかに違うものである。よって b の「主観性という概念に近い」という記述は明らかに誤りを含む。

17.－ d （3 章 8 段落）	難易度 M

文中における「世界」の用法より解答

文中においては「世界」という言葉は「大海」という言葉の反意語として用いられていることを読み取る。つまり、情報が未整理である大海の中から、人間の能力によって世界を導きだしていくのである。これらの言葉の定義は文中には何カ所か登場するが、はっき

©BUCHO.NET

りと述べられているのは 3 章 8 段落である。

「もはや、彼女にとって、その瞬間から、刺激の「大海」は失われた。それは、今や、分節化され、意味と、構造とを与えられた、一つの「世界」として、彼女の前に現れた。」

無秩序な刺激の「大海」は人間によって文節化され、意味と構造とを持った「世界」へと変化する。以上の内容を踏まえると選択肢 d の「構造的に分節化された環境」が正解。a～c はいずれも「大海」の説明であると言えるだろう。

18.－ a （4 章 3 段落）	難易度 E

「七歳あたりで人間は何ができるようになるのか」という観点から解答。

この問題は公教育に関して聞いているが、選択肢をよく読むといずれも「人間は七歳あたりで、～できる。～する。」となっている点に注目。つまりこの問題は人間が七歳でなにができるようになるのかを聞いている。このように選択肢を見ることで、その問題が直接的には何を聞いているか、ということを意識しながら問題をといていくとよりスピーディに解答できるようになるので覚えておきたい。さて、問題文中で人間が七歳でなにができるか述べているのは 4 章 3 段落である。

「共同体のなかで成立する「間主観性」に、子供がある経度十分参加できるようになるためには、出生後ほぼ七年くらいが必要であるらしい。「狼少年」、「狼少女」の例も、あるいは、大脳の発育が七歳程度まで続くという事実も、あるいは七歳あたりを区切りに、多くの国や地域で公教育が始まるという事実も、いずれもそうした点と関係がありそうだ。」

以上より a が正解であることがわかる。

19.－ c	難易度 D+

論文での「ヒト」と「人間」の使い分けより解答

それぞれの文中における用法より使い分けを判断する。まずヒトに関しては 1 章で頻繁に登場するが「言うまでもなく、ヒトの生物学上の最大の特徴は直立二足歩行である。（1 章 5 段落」と述べられているように生物学的に論じられる場合に用いられている。一方「人

©BUCHO.NET

間」の方は以下のように用いられている。

「そこで、ヒトは言葉を覚え、共同体のなかで暮らせるように訓練を受ける。一言で言えば、「人間」になっていくのだ。(1 章 10 段落)」
「言い換えれば、先にも述べたが、赤ちゃんは、お母さんの子宮のなかで「ヒト」として育ち、出生後しばらくは「延長する子宮」としての共同体のなかで、「人間」として育つのである。(3 章 1 段落)」
「考えて見れば、日本語の「人間」という言葉は、なかなか奥行きが深い。「人の間」というのは、人間が、複数の人間たちの造る共同体のなかで生きることが必然であることを暗示している。(3 章 1 段落)」

これらの記述より、生物学的な「ヒト」以外の一般的な用法としての「人間」が用いられていることがわかる。よって c の「生物学的に論じるときは「ヒト」を、一般的には「人間」を使う」が正解。その他の選択肢はそれぞれ誤りを含む。

a 進化の対象として「ヒト」が用いられているわけではなく、あくまでも生物学的な論点から「ヒト」が用いられている
b 他の動物と比べる時以外でも、人間の生物学的な特徴を述べる部分で「ヒト」が用いられている
d 「人間学」は文中で述べられておらず、かつ、「人間」の用語は一般的な用法で用いられている。

20.－ b （4 章 4,5 段落）	難易度 M

「抑圧」に関する論述より解答

4 章 4,5 段落において日本語と英語の違いが述べられているが、筆者の考えとしてある人にとっては抑圧と成りうるし、ある人にとっては抑圧とならない、ということが述べられている。結局のところその人の考えがその言語圏の考え方に整合しているかどうかで抑圧になるか否かが決まるわけであるから、b の「言語圏によってケース・バイ・ケースになる」ということである。
c の「言語一般について抑圧性を問題にするのは無意味である」が非常に紛らわしい。確かに個人の考え方によって抑圧になるか否かが決まってくるわけであるから、「抑圧性を問題にするのは無意味」と読みとることも可能であろう。しかしながら、はっきりと筆者が無意味であると述べているわけではなく、かつ b が完全に文意に沿っていることを考える

©BUCHO.NET

と、b の方がより適切であると考えられる。また、「ある人にとっては抑圧になり、ある人にとっては抑圧にならない」と筆者がわざわざ問題にしているのであるから、「抑圧」というものが全く無意味であるわけではないであろう。

21.－ b （4 章 5 段落）	難易度 D

「抑圧」に関する論述より解答

文中での「抑圧」の用法は明確に定義されていない。しかし選択肢を検討することで答えは絞り込める。さて、文中では以下のように用いられている。

「確かに、日本語は「自立して社会で有意義な仕事をしたい」と思う女性にとっては「抑圧的」に働き得るかもしれない…」（4 章 5 段落）

ここでは日本特有の文化が社会的に女性自立に対して抑圧的、であるともとらえられるし、あるいは、日本語を母国語をする人にとって、考え方の根底となっている言語の中に女性の自立に大して心理的な抑圧作用を持つものとも、両方の見方ができる。この段階では社会的抑圧か、心理的な抑圧かは絞りにくい。よって選択肢より判断する。選択肢を検討すると a,c,d は社会的抑圧、b のみが心理的な抑圧を述べている。b だけが明らかに異質であり、答えは一つしかないのであるから、b が正解。

字義的に抑圧ということを考えてみても、文中での用法は、強制的、物理的な抑圧というよりは、心理的、感情面での抑圧、という用法に近いので、b は間違いではない。

22.－ c （4 章 6 段落）	難易度 M

「文化」に関する論述より解答

文化に関する論述は 4 章の 6 段落において行われている。

「ここでの「文化」という概念には、「文化包丁」とか「文化住宅」などという使われ方をしたときの「文化」の意味はない。要するに、ある共同体にあって、その成員である人間が知覚し、考慮し、判断し、行動するための、あらゆる装置の全体を「文化」と呼んでおく。」

要するに文化には様々な意味があって、曖昧であるので、文中での文化の用法を筆者は

©BUCHO.NET

示しているのである。よって c の「「文化」には、時に応じて多様で曖昧な意味を与えられがちだから」が正解。その他の選択肢はそれぞれ誤りを含む。

a 根元的に決定的な意味を持つから定義したとは読みとれない。
b 「文化と呼んでおく」と筆者がわざわざ述べているわけであるから、辞書的な意味で「文化」を定義しているわけではなく、筆者がこの論文中の定義として述べているものである。よって「価値的に使われることによる誤解を防ぐ」という文化の特定の意味と誤解されないようにするというよりは、「文化が多様で曖昧な使われ方をするので、ここで論文中での「文化」を定義しておく」ということを筆者は述べている。
d 文化が「言葉によって規定される世界の総体として重要」である可能性はあるが、そのことは、筆者が文化に対してわざわざ文化を定義したことを説明していない。

＜注：この解答・解説はサンプルです。実際には問 40 まで続きます。＞

©BUCHO.NET

Summary

＜本文要約＞

ヒトは他の動物と比較すると、未熟な状態で生まれてくる。この原因は脳が他の動物より大きいことに原因がある。生まれてきた子供は母親や家族など、いわば延長する子宮とも言うべき共同体中で育つことが必要で、そのことによって人間として必要な能力を手に入れていく。ヒトは脳の新皮質、そして手が非常に発達している。

ヒトは原始歩行など哺乳動物が本来備えている能力を不完全ながら備えているが、これらの能力は生まれてから数週間後に完全に消失してしまう。刺激の大海に浸かりながら、大脳を経由して刺激を処理する機構を大脳の中に整え、共同体の中でどのようにそうした処理を行うのかまでも学んでいくことになるのではないだろうか。

人間は大脳の発達に伴い、あらゆる種類の刺激の中から特定の刺激を取捨選択し、それらに意味や構造を見出すようになる。このためには言葉が欠かせないが、ヘレン・ケラーが一つの言葉を覚えた事で、人間的な意味と構造を持った世界を見出したことはその劇的な例と言えるだろう。

言葉は共通の世界を生み出す働きを持つ。それらがあって初めて、共通のコミュニケーションが成立する素地が得られる。言葉を学ぶということは人間になるということに等しいが、それは人間が文化の中の存在であるということにも関連している。

ある民族では好ましいとされるものでも、他の民族には好まれないということがある。共同体の中で育つと、言葉以外のものに対して認識、判断、行動のパターンができ、感覚的な価値観さえ共通になると言える。

ヒトは共同体が間主観的に共有する価値観を学ぶことによって人間になっていくが、それは同時に主観を形成することでもある。つまり人間には間主観性から逸脱する自由が与えられている。共同体は自らの間主観性に服従することを求める一方で、そこから逸脱することを許している。一方主観はそこに安住を求める傾向と逸脱することを望む傾向とを持ち合わせている。

人間は家族や学校、職場など様々な集団に属するが、それぞれの間主観性の中に存在している。多様な間主観性の中にあって、主観としての自我は幾重にもなっているが、それらを束ねる自我が存在している。これは人間の神秘とさえ呼べるのではないだろうか。

＜注：人文・社会科学の全ての解答・解説には要約が添付されています。オンレクでは論文構造の理解のため要約を作ることを推奨しています。＞

©BUCHO.NET